

おいしい米づくり情報

2018/04/20



第3号

庄内総合支庁 農業技術普及課
Tel. 0235-64-2103

- ① 温度管理の徹底で健苗育成を目指そう！
- ② 地力に合わせた適正量基肥で良質米生産！
- ③ 適正な移植と水管理で、活着促進！

●育苗後半のポイント

育苗では、**出芽までの温度は30～32℃**、出芽期から緑化期の温度管理は、下表の通りです。

気象庁の1か月予報によると、気温の高い確率が60%と高温の予報となっています。高温障害に注意しましょう。また、**夜間の温度管理**には細心の注意を払い、低温になる場合は保温資材をかけ、**苗を低温から守りましょう。**

◎各生育ステージの温度管理

生育ステージ	最適気温	最高気温	最低気温
緑化期(～1.0葉期)	20～25℃	30℃以下	10℃以上
硬化期(1.5葉期以降)	15～20℃	25℃以下	5℃以上
移植1週間前から	昼夜ともハウスを開け、外気温に慣らし、苗を馴化する。		



ハウス内の温度は、**苗の高さの温度計でしっかり確認**

※緑化期は過高温による「やけ」に注意します。また、緑化が終了したら、原則べたがけのマルチをはがし、葉鞘長の短いがちりとした苗をつくります。

苗の老化を防ぐため追肥を行う場合、稚苗は1.8葉期に、中苗は2葉期と3葉期に1箱当たり窒素成分で1g追肥して活着のよい苗に仕上げます。

●基肥散布のポイント

近年の大きな気象変動に柔軟に対応するためには、適切な基肥量を施用することが重要です。無理のない施肥設計となるよう、もう一度確認しましょう。

良食味・高品質米の安定生産のためには、**初期生育確保が重要**ですが、それを基肥の増量に頼ると、後半に持ち越し、穂肥ができない稲姿になる可能性があります。**地力に合わせて適切な量を施用しましょう。**

◎品種別施肥量

(N kg/10a)

地力	はえぬき	つや姫	雪若丸	ひとめぼれ	コシヒカリ	ササニシキ
高	4.0～5.0	3.0	4.0	4.0	1.5～2.0	3.0～3.5
中	5.0～6.0	4.0	5.0	4.5～5.0	3.0	3.5～4.0
低		4.0を基本とし 1.0を上限に増量	5.0を基本とし 1.0を上限に増量			

※ただし、堆肥を施用する場合は減肥する。

●移植作業のポイント

- 収量・品質及び食味を安定させる**移植適期は、5月10日～20日頃**です。移植時期が遅れると、初期茎数が確保できず収量に影響する例もあります(図1参照)。**早めの移植で初期茎数を確保**しましょう。
- **好天の日に移植を行い、低温や強風による植え傷みを防止**しましょう(図2参照)。植え傷みを抑え、速やかな活着を促すことが初期生育の確保に繋がります。
- **栽植密度は70株/坪程度、株当たり植込本数4～5本で、m²当り植込本数100本前後が標準**です。栽植密度が低いと、今後の気象によっては、茎数・穂数の不足、1穂粒数過多による登熟不良、玄米タンパクの上昇等につながる場合があります。気象変動に対応するために適正な栽植密度で茎数確保に努めましょう。
- **適正な植え付け深さ(2～3cm程度)となるように留意**しましょう。根が露出するような過度な浅植えでは、除草剤の葉害が発生しやすくなります。反対に、深植えは初期の分けつを抑制し、葉色も濃く推移し、うわ根の発達も不十分になります。

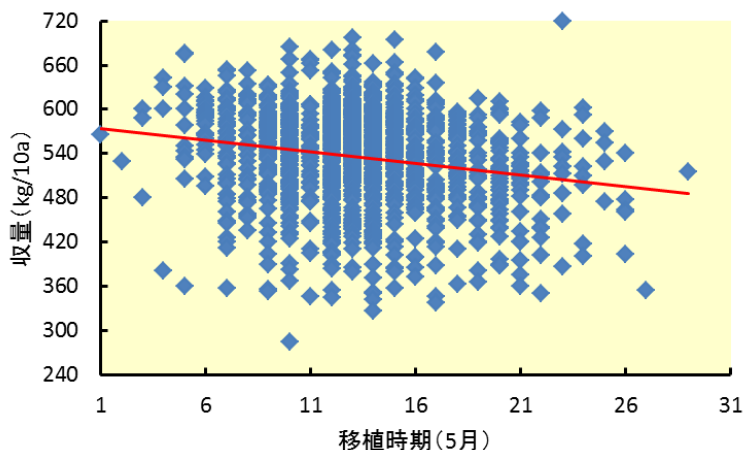


図1 つや姫の移植時期と収量の関係(H 29 管内)

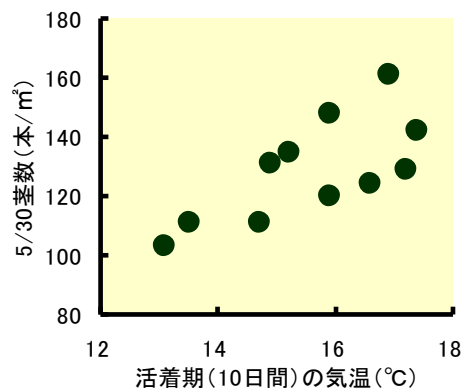


図2 活着期の気温が初期生育に及ぼす影響(H 10～19 庄内支場作況圃データ)

●移植後の水管理のポイント

- **活着までは水深4～5cm程度**とし、活着以後は分けつの発生を促進させるため、**日中止め水・朝夕かんがい**を徹底し、基本的に**水深3cm程度の浅水管理**で地水温の上昇に努めましょう。
- 強風や低温(平均気温 15℃以下)が続く場合は、深水管理で稲体を保護しましょう。

春季農作業事故防止運動強化月間 4/10～6/10 実施中!

お互いに声をかけ合って、農作業安全に努めましょう

農薬はラベルをよく読み、適正に使用しましょう